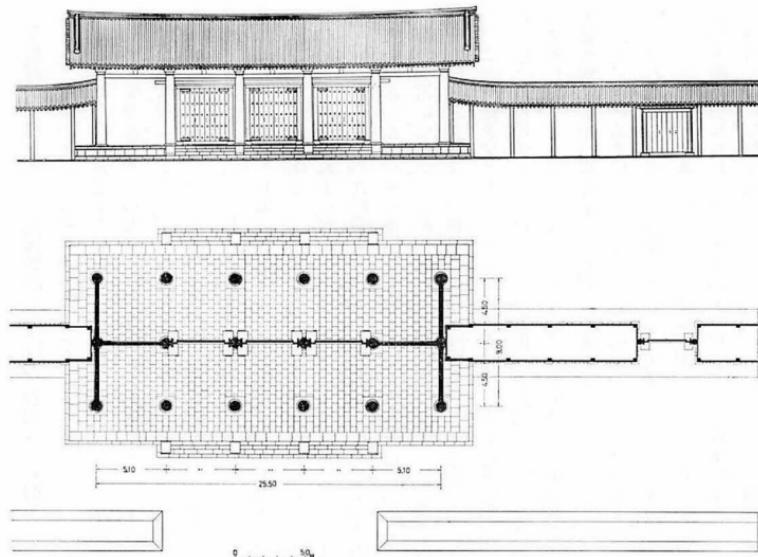


四、模型製作と遺跡覆屋の建設

平城宮跡では、遺跡の発掘と同時に発見遺構・遺物の模型製作と遺跡の露出展示を行っている。実際の遺構を展示保存することは云うに及ばず、模型の製作は残された遺構や遺物の現状から、もとの姿を復原するという重要な研究課題でもある。また、実際に遺構や遺物を調査する機会をもたない研究者には重要な研究資料ともなり、さらに一般の人々の恰好の教材ともなるものである。平城宮跡では復原模型を建物・遺構・遺物について製作し、遺跡の展示は直接遺構の上に上屋（覆屋）をかける方法で行つている。

模型の製作は、建物・遺構・遺物について行つているが、建物の復原模型は昭和40年度より作製し、すでに朱雀門を始め内裏正殿とその附属棟・築地回廊などを作成し、今年度は宮城西面南門を完成した。

建物の復原模型は、発掘した遺構から忠実に10分の1の縮尺で作製した。建物の設計については現存する奈良時代の建造物発掘された奈良時代の建物遺構、平安宮の建物を描いた絵巻物および文献・記録などを参考に基本設計を行ない、さらに平城宮跡発掘調査常任指導委員会中の建築史学専門家の指導を得て、構造・意匠など厳密な検討を加えて作製した。材料はすべて松材で、完成した建物の材積は、朱雀門で 956.1cm^3 、内裏正殿と附属棟で 633cm^3 、西面南門で 291.1cm^3 である。実際の建築物はこの材積の約1千倍と考えても大差ないものであろう。製作には6ヶ月から8ヶ月を費やしている。

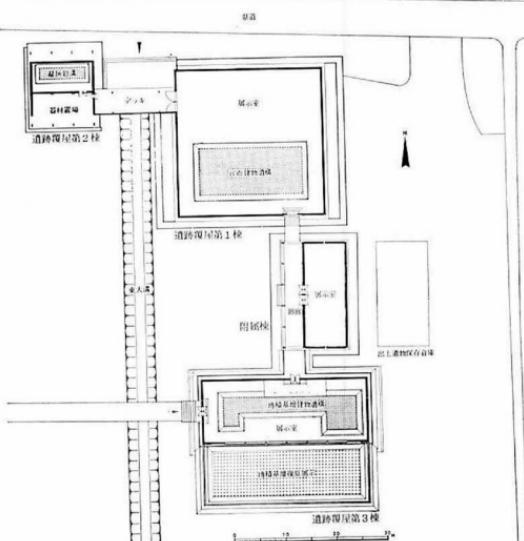


第4図 平城宮西面南門復原図

ここで昭和42年度に作成した西面南門（玉手門）について記しておこう。遺構は昭和38年度の発掘調査（第15次）で発見したもので、門の東半分と西面大垣が確認された。基壇はすでに削平されているが、基壇の掘込み地業が残っていた。基壇の大きさは南北幅32m、東西幅推定14mで朱雀門と比べると南北幅はほど等しく、東西幅で約3m短かいことがわかった。この結果、西面南門（第4図）は5間×2間〔桁行は朱雀門と同じく17天平尺（6.13m）等間、梁行は15天平尺（4.5m）等間〕とし、東大寺軒轅門にならう単層切妻造本瓦葺。基壇は凝灰岩壇上積基壇とした。柱径は軒轅門にならい72cmとし、柱は上部に粽を付した。組物は平三斗とし、構造は二重虹梁盤股とした。軒は二軒とし、地檼断面は円、飛檐檼断面は角とし、内部は三棟造とした。屋根は棟端に鬼瓦をつけ、降棟をもうけた。

次に遺構模型の製作は昭和42年度に行ない、第21・38・40次発掘調査で発見した埴積基壇建物を中心とする東西70m・南北130mの範囲を5分の1の縮尺で忠実に作製した（第7図）。材料はポリエスチル樹脂を使い、ガラスクロス埋込み、彩色仕上げとした。土色は地山面と整地層の面を区別し、下層遺構のある箇所は上層遺構をとりはずして見えるよう二重とした。井戸や溝の側面・底面などの細部についても忠実に表現した。

遺物の模型はすでに隼人橋や織物を織る際に使用した糸巻・紡垂車を作成した。これらの遺物は材質が木であり、変形や破損を受け易いため早急に現状模型を作る必要がある。模型は現状そのままのものと、さらにこれから完形復原と両方を原寸で行っている。現状模型は



第5図 平城宮遺跡覆屋配置図

色彩も現在認められる色調を表現し、復原模型では残存する色彩から復原した色彩を行っている。材料はポリエチレン系樹脂を使つたが、範は同様合成樹脂を使用して作つたので厳密な現状の記録となつてゐる。

昭和43年度には引続いて塙積基壇建物を10分の1の縮尺で復原する



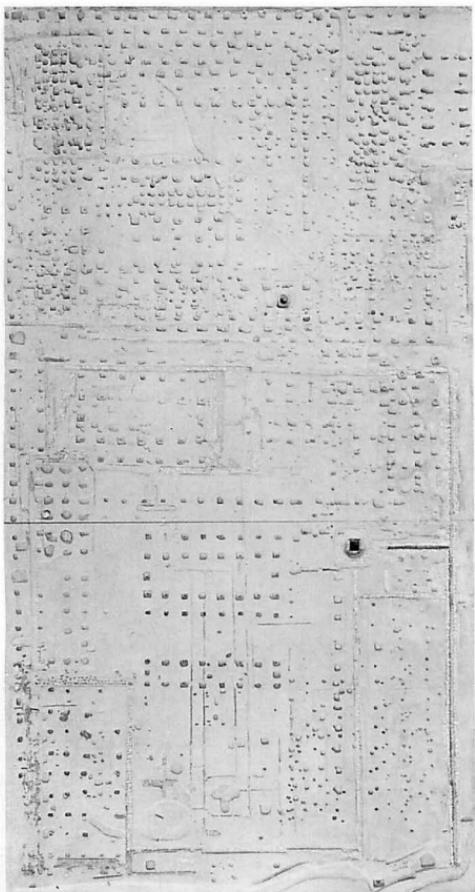
第6図 遺跡覆屋内部

覆屋は昭和40年度から建設を始め、覆屋、陳列棟など4棟が完成して、現在これらは模型は遺構とともに覆屋内に展示し活用している（第5図）。総面積は1,500m²である。建物は鉄骨ブロック造平屋建てで、外観のデザインは直線を基調とした簡素なものである。これらの建物は重要な遺跡が埋っている上に建てたため、地下を掘って基礎をした。設けることは出来ず、遺構が破壊を受けぬよう約1mの盛土をした。壁面は上部に設けた窓、出入り口以外はすべてブロック積みで、柱にはH型鋼、屋根にはデッキプレートを用いており、鉄骨はすべてコーカルテン鋼である。

昭和40・41年度に建設した3棟の覆屋と陳列棟には、第21次発掘調査で発見した掘立柱建物・礫灰岩切石積溝を展示した。今年度は、第38次発掘調査で発見した埴積基壇の建物を露出展示した(第6図)が、この覆屋には実験的に実際の埴積基壇遺構の北半分を覆屋内に露出させ、南半分は覆屋の外で基壇を復原展示することにした。覆屋内には遺構の展示とともに広い展示空間をもうけ、建物・遺構の復原模型や600分の1の平城宮全體復原模型、写真などを展示している。

遺跡覆屋の付属棟として建設した出土遺物陳列棟は、床面積が160m²で、建物の構造は遺跡覆屋と変らない。建物内には壁面に10mの陳列棚をもうけ、発掘調査で出土した軒丸・軒平瓦をはじめとした瓦類・土器・金属器・木器類などの遺物を陳列している。床面には同様出土した井戸、掘立柱柱根・木樋や建築部材を展示している。これらの覆屋・陳列棟の建設は、すべて文化庁文化財保護部記念物課の予算で行つたものである。

(村上 訪一)



第7図 遺構模型